

アメリカ文学に於けるナチュラリズム ム形成とドライサーの位置について

On The Formation of Naturalism in American
Literature and Dreiser's Situation in Its Formation.

大 森 孝

序

世界文学史の上に威大な足跡を残し、又現に印しつゝあるアメリカ文学に就て、筆者は前回、本誌三十五号に於て、アメリカ文学發生の基礎を形成したピューリタニズムに関し概要を述べたのであるが、今回は時代の隔たりは有るがアメリカ文学形成上の一大要素となつて居る自然主義（ナチュラリズム）に言及し、之れが現実主義と同様に考察されて居る事に批判を与え、そして自然主義形成上の主役であつたドライサーの人間像を解明して行こうと思ふのである。

ドライサーは其のメリットに比してそれ程フェーマスではない。それは彼の文体が大いに原因して居ると思われる。したがつて彼に就ての詳細な参考資料を得る事は現在随分困難である。しかし第二次大戦後のアメリカ文学殊にアメリカ現代作家即ちルイスやレアレル。又黒人作家リチャード、ライト。更にヘミングウェイ、フォークナー等に強い影響を及ぼしてゐると考えられる一大作家ドライサーに就て筆者は、その人間像、殊に自然主義傾向の強烈さに関し作品を通してそれ等を明示して行こうとするものである。

○ アメリカ自然主義の形成

アメリカ文学に於て現実主義と自然主義と同じ様に考えられて居る面も

多く有るが、殊に現在アメリカに多いが、しかし詳細にアメリカ文学を考察すると、両者は必ずしも同一と云う事は出来ない。現にアメリカに於て *Candid realism* (Calverton--*The Liberation of American Literature*) とか *realism a' la Francaise* (Pattee--*The New American Literature*) と云う言葉を用いて現実主義の意味を限定するところに筆者は単なる現実主義と違った要素を持つ自然主義の存在を認めざるを得ないのである。

アメリカ現実主義が真にアメリカ社会の現実を反映したとするならば、それはその主唱者ハウエルズ (William Dean Howells 1837~1920) に於て既に悲観懐疑の傾向を帯びてもよかつたのである。しかし事實はハウエルズ及びその影響下に在った当時のリアリスト等はアメリカ社会の現実に盲目でありすぎたのである。

彼等は手法に於てはヨーロッパ大陸の現実主義に学んだけれども、その人生観に於ては、楽天主義を特色とすると云う結果となつたのである。彼等は、デモクラティックな民衆の希望に満ちた愉快的生活を反映し、讚美するのが、アメリカリアリズムの、広くは、アメリカ文学の基調であると信じていたのである。

しかるに二十世紀に入って自然主義は、或るアメリカ作家の場合に於ては、ハウエルズの現実逃避の文学に対する反動として採用されたに相違ないが、反面古いローマン主義への抗議としては、それは現実主義と同一の立場に立つて居ると思われるのである。此の故に広い観点より見て自然主義を現実主義の自然的発展と見なしてよいと思う。而して其処にハウエルズの時代に見られない懐疑と悲観の姿が表われて居たのである。

自然主義は、背後に近代科学とデモクラシーを持つとしても、其処に悲観的人生観の存在が認められるのであり、これが現実主義と比較した場合の相違であると思ふのである。同時に此の悲観的傾向は人間社会を支配する或る力に対し之を解釈し把握しようとする努力を伴う。それ故有るがま

ゝに人生を見るリアリズムの客観的傍観的態度は、ナチュラリズムに於ては、其れに主観の色を交え積極性を帯びて来るのである。此處にハウエルズの現実主義と、ドライサーの自然主義との相違が明らかに出て来るのである。

然して十九世紀末から二十世紀初頭に於けるアメリカ人の悲観と懐疑は何處から来たのであろうか。其れは近代科学の発展と、其れがアメリカ社会に及ぼした影響と、此の二つに帰すると思ふのである。

即ち、其等を少しく具体的に解明するならば、人生に於ける一切の現象は自然の機械的方則に従う物質の妄動に過ぎないのであり、そして、此の現象の一つとして、人間は遺伝と環境とから脱し切れない蛋白質の集合体に外ならない、と考へて居たのである。こうした唯物観に囚へられたアメリカ人にとって、従来の楽天的希望や意志は次第に消えて行つたのである。

今、自然主義の代表的作家ドライサーの *A Book about Myself* の中より一節を引用して見よう、「スペンサーの綜合哲学を読んだ頃の私は大きい成功の希望を抱いて居たし、又成功する事によつて、何か安住の地を発見出来ると信じて居たのである。しかし今、私の得た確信は何であらうか。人間は精神的に現在も又未来も、安住出来ないであらう、という事である。人間は一つのメカニズムだ。唯、自然に出来上つた一つのメカニズムで、然かもその運轉たるや、頗る下手なものである。」

右の様な生物学的決定論と共に生れたのは、マルキシズムである。其の唯物史観は、資本主義經濟機構の必然的崩壊の予言に於て一種の宿命觀を含んで居り、それは現在の生産關係に伴う階級制度が、如何に絶望的な、運命的な重圧を一般プロレタリアの上に加へつゝあるかを、明瞭に印象づけるのである。これが生物学的決定論に対して、社会的決定論、又は經濟的決定論と呼ばれて居り、其の代表的作家は、チャック、ロンドンであつた。アメリカ人の考え方を長く支配して来たロマンチズムは、此の方面か

らも崩壊して行つたのである。

要するに1890年代は、老いたアメリカと若いアメリカとの戦いの時代であつた。暴虐な社会組織は、新しい階級組織を形成するのに好都合な状態に在つた。不可避な社会的勢力の動向から発生する悲觀的宿命觀は、暗くアメリカの頭上に垂れ下つて居たのである。こうしてアメリカ的樂天論は崩壊し、背徳で悲觀的な一種のリアリズムが、発生するのに適当な智識的背景が、準備されたのである。

以上の様な社会的、智識的背景の中で、アメリカ自然主義は、科学思想と、それに伴う決定論的人生觀の温床に萌芽し、成長したものである。

即ちクレインの *The Red Badge of Courage* (1895)、ノリスの *Mc Teague* (1899)、ドライサーの *Sister Carrie* (1890)、ロンドンの *The Call of the Wild* (1903) 等によつて始まり、ドライサーの *An American Tragedy* (1905) に到つて確實に実を結ぶのである。

自然主義の大体の傾向に従つて分ける時、クレイン、ノリス、ドライサー等を生物学的決定論者、やや遅れて出現したロンドン、アプトン、シンクレイ等を經濟的決定論者と云つてよいと思うのである。

筆者は自然主義の代表的作家ドライサーについて述べる前に、自然主義の名誉ある開拓者であるクレインとノリスについて簡単に述べて見たいと思うのである。

スティーブン、クレイン (Stephen Crane 1871~1900) は、新聞記者出身であり、アメリカ小説界に大きな足跡を印しながら、三十才前後で死去したのである。アメリカ自然主義は、クレインの *Maggie, a girl of the street* (1893) を以つて開幕すると云えるのである。

彼はニューヨーク市の貧民街に住んだ事があり、貧民生活に対する彼の觀察の結晶が此の小説だと云われる。此の作品は性格描写に無理がなく、自然主義的色彩が、全篇に漂つて居る。クレインを有名にしたのは *The red Badge of Courage* (1895) であつた。彼は此の小説で、南北戦争に於け

る一戦場を取り扱い、平凡な一兵卒を主人公として戦争の恐怖を描写している。名もない一兵を主人公とし、全く英雄的分子を奪い去った戦争小説は、アメリカでは、初めてであった。殊に彼が終始、科学者の客観的冷静さを保持し得た事は、此の書を、ユニークな存在たらしめたのである。

クレインは、其後キューバの内乱に、新聞報道員として参加し、その体験から生れたのが、短篇 *Open Boat* (1898) である。これは、四人の人間が難破船から、ボートで洋上にのがれ、陸地にたどりつく迄の冒険を、淡々とした筆致で、しかも極めて印象的に叙述したものである。その文体は現代作家に迄つなると云えるのである。又彼は、詩の方でも自然主義的な詩、例えば *The Black Riders, War is Kind*, 等を書いて居る。

次にフランク、ノリス(Frank, Norris 1870~1902) は二つの自然主義小説によって記憶される作家である。即ち *Mc Teague* (1899) と *The Octopus* (1901) と、*The Pit* (1903) である。彼も三十二才で死去したのである。

先づ「マクテীগ」は、桑港の一齒科医を主人公とし、カリフォルニアに於ける平凡で、下等な生活を描写して居る。マクテীগのリアリティックな描写は、人間に於ける獣性の研究と云えるのであり、貧困と、病的な金銭慾と、愛なき結婚と、そしてこれらの経済的、又は自然的不可抗力の前に、墮落して行く人間を描いたものとして、自然主義的傾向の強い作品である。

The Octopus は、ノリスが意図した雄大な、叙事詩的三部作の第一篇である。「オクトパス」とは、章魚の事であり、残忍な手段で、カリフォルニア地方小麦耕作者の利益を、奪取する鉄道会社を象徴するのである。そして、此の小説は、独占的優越を保持する鉄道会社と、又会社の不正手段に対し、死を堵して争う農民社会の物語である。そしてその敗北の物語である。

The Pit は、シカゴの穀物取引所のことである。即ち小麦の叙事詩は、

農場から穀物取引所に移るのである。この中で彼は、小麦の買占めによって、その需給を支配しようとする投機業者を描こうとした。即ち彼等の魔手は、消費者と生産者の利益に反して、縦横に振られるのである。しかし偉大な生活力であり、栄養分である小麦は、何等妨害を蒙る事なく洪水の様に、静かに悠々と、その目的地に向かって流れて行くのである。それは西部から東部へ、東部からヨーロッパに、そして印度迄押し寄せて行って飢えた印度人を養うのである。

即ち彼は、小麦によって不可抗的な大自然の偉力を象徴しようとしたのである。

第三部は彼の急死により着手されずに終わった。又彼の論文集 *The Responsibilities of the Novelist* に於て *romance* と *realism* の有効な結合を実証して居る。

クレインとノリス両者の自然主義は、其の客観的な見方に於いて、ドライサーが後継者となり、社会問題に対する関心に於いては、チャック、ロンドンや、アプトン、シンクレア等が、之を継承して居るのである。

次に筆者は、アメリカ自然主義の主唱者であり、代表的作家であるドライサーについて言及して行こうと考える。

○ ドライサー

セオドラ、ドライサー (Theodore Dreiser 1871~1945) は、アメリカ文学界、殊に小説界に於ては最大の作家である。彼が三十年に亘って、自然主義の孤塁を守り、終に自然主義に勝利の栄をもたらした壮烈さは、アメリカ文学史に於ける一偉観であると云えるのである。

ドライサーは、ドイツからインディアナ州に移住したドイツ農夫の家庭に生れた。父は狂信的なカトリック教徒で、多くの子供は、母親の勤労と愛情によって育てられた。住所を転々として、1887年シカゴで、彼は皿洗いなどして自活の道に入った。彼はインディアナ大学を中退し、新聞記者

となつて、シカゴ、セントルイス、ピッツバーグ、ニューヨーク等で活動した。この間の色々な経験と幻滅の記録が、*A Book about Myself* となつて発表されたのである。此の自叙伝は彼を知る上に大切な資料である。

ドライサーの性格をつくつた根本のものは其の家庭の貧困と、其処を支配して居た偏狭な宗教心であつた。彼は知性的、情操的に歪んだ少年として成長し、性的恐怖を感じ、社会的には、屈辱と反抗の気分を深められた。スペンサー等を通じて、進化論を知るようになると、生物的な盲目な力に支配される人間の動き、神の恩恵も企画も無い、機械的な文化の発展こうした決定論を完全に受け入れたのである。こうして彼が、アメリカ社会に見るものは、資本主義を背景にした弱肉強食の相であつた。彼にとっては、此の世は、猛烈な戦場で、そこでは弱者は、いやでも、つぶされてしまうと云う事は、一つの事実なのである。彼は、社会を改革しようなどと、大げさな事は云わない。社会は依然として、そのまゝの社会であり、社会は必ず個人と衝突するものであり、個人の衝動は、社会のさまざまな必然と対立するものである。此れ等の事は自然の理法であると、彼は考えて居たのである。

彼は、数年の記者生活の後に処女作 *Sistr Carrie* を 1900年に脱稿し、1911年に其の姉妹篇と云える *Jennie Gerhardt* を発表した。更に *The Financier* (1912)、*The Titan* (1914)、*The Genius* (1915)、*An American Tragedy* (1925) 等の大作を発表したのである。

ドライサーの自然主義の傾向をより強く明示する為、筆者は、其の作品の筋を少しく、追つて見ようと思うのである。

先づ処女作 *Sistr Carrie* について—

カーリーは田舎娘らしい美しさと、一種の聰明さを持つ少女である。シカゴで暮らして居る姉を頼りに、彼女は希望を抱いて、故郷を出たのだつた。シカゴに着いたカーリーは、姉夫婦のつゝましい生活と、都会的な個人主義的冷淡さに接した。彼女は姉の所に居たゝまれず、適当な職

な求めて毎日歩き廻った。漸く婦人帽子屋の女工の口が見つかり、やっと一安心したのであったが、まもなく病気になり、その為職をも、失う結果となった。其の時彼女の前に現われたのが、ドルーエと云うセールスマンの、好色の男であった。彼は彼女が田舎から出て来る途中の列車の中で、知り合った男であった。彼女は、だまされて、ドルーエの二号となったが、まもなく彼が信頼出来ない男である事を知った。そうした彼女の心を占領したのは、或る有名な会社の支配人ハーストウッドだった。彼はドルーエとは反対に頼もしい男であった。此の際の彼女の心的変化をドライサーは、次の様に述べて居るのである。

「彼女は、実はドルーエを愛していなかった。彼女は彼よりも利口だった。彼女は漠然と彼の欠点が分り始めて居た。もし、彼女が多少彼の真価を判断出来なかつたなら、今よりもつと困って居たかも知れない。もしそうでなかつたなら、彼女は、彼を讚美したり、彼の愛情を失うまい捨てられまいと、心配したかも知れない。だが、実際には、彼女は彼を独占するため、少しばかり、心配しただけだった。

ハーストウッドが訪ねて来た時、色々の点で、ドルーエよりも、秀れて居る事を感じた。彼は、女の誰れでも喜ぶ一種特別の敬意を、彼女に払った。彼はびくびくしなかつた。同時に大胆過ぎもしなかつた。彼の魅力は、親切な事だった。……………」

こうして彼女はドルーエと別れて、ハーストウッドと同棲するようになった。彼女としては、それは自然であり、当然であった。何故なら、それは、より安全に生きる道であったからである。しかし、彼女にとっての安全は、他の多くの人々に、大きな不安と、危険をもたらしたのである。何故なら、ハーストウッドの一家は、この為崩壊してしまつたのである。妻子を捨てたハーストウッドは、会社の金を盗み、カリーを連れて、モンリオールへ、更にニューヨークに逃れた。其処で色々仕事をして見るが、信用を失って居る彼は、凡て失敗して、どん底に沈んでしまつた。そして最後には、生に対する執着すらなくして、乞食同然にな

ったのである。彼女は、彼の為に働かなければならなくなつた。彼女は喜歌劇の踊子となつた。やがてよい役が、当てられる様になると、良い衣裳が必要となつた。その為金が欲しくなつた。彼女はハーストウツドを見捨て、金を節約した。彼女の美貌は、案外容易に成功を彼女に与えた。彼女はだんだん昇給して行つた。しかしもう、ハーストウツドの所には、帰らなかつた。そして、彼女は一応の成功を収める事が出来たのである。彼女が到底望んでも叶はぬと思つて居た物も手に入った。しかし手にして見れば、案外つまらないものに思えた。彼女は、やはり寂しかった。彼女は、心から幸福にはなり得なかつたのである。

次に Jennie Gerhardt に就て述べて見るにドライサーは、此の作品の材料は、前のカーリーの作品と同じ様な材料を使用して居る。

先づ筋を述べて見ると、

貧しいドイツ人の子として生れたヂエニーは、或る男に誘惑される。しかし、其の男が急死して困つて居る所を、他の財産家の独身の男に救はれて、その世話になる。男は彼女の前身について何も知らない。日が経つにつれて、ヂエニーが此の男を心から愛するようになり、男も又、彼女を愛するようになると、前の生活の發覚に対する恐怖が、彼女の心の中で大きくなって行くのである。そこへ男の一家、又周囲から彼女に対して圧迫が加わつて来る。男も何時か、心変わりして他の女に走る。しかも此の男も又死んでしまうのであり、結局ヂエニーは、身の置き所もない一人ぼっちになってしまうのである。

此の物語に於けるドライサーの手法は、格別山もなく、安価な感傷もない。全く客観的であるが、彼女の悲劇的な運命がよく記されて居る。

此のカーリーとヂエニーの二人の女の悲劇的な運命について、メンケン (H. L. Menken 1880~1956) は The Book of Prefaces (1917) のドライサー論の中で次の様に述べて居る。訳文を記して見ると、

「カーリーとヂエニーの物語は、全く同一だ。ドライサーは、誘拐された少女の涙つばい物語などしているのではない。実は誘拐は、ヂエニーに

対しても、カリーに対しても、決して悲劇ではない。彼女等が之に依り得たものは、失ったものより大きく、而も彼女等が新に得たものは、肉体に対すると同様に、精神に対するものであった。彼女等が、困窮から安全に、恐怖から安心に入っていくにつれて、より細かな知覚の目ざめが、同情心の拡大が、個人性と呼ばれる美しい花々が、愛と生に対するより大なる能力が、そこに生れて来たのである。

だがそれ等と共に、又必然なものとして、人生の悩みに対する能力も成長して来たのである。それ故に最後に愛が失われ、空しい年月が、彼等の前に展開して来た時、彼女等は、覚醒した婦人として、曾って、さ迷へる少女時代に犯した愚行の代価を、払わなければならなかった。要するに、カリーとチェニーの悲劇は、彼等が墮落したところにあるのではなくて、却って向上したところに在る、彼女等が人生の溝に墮落したからではなく、却って、そこを出て、星の光を仰いだところにある。」次に *The Financier* と *The Titan* に言及して見ると。

ドライサーは此の作品に於いて、十九世紀後半の黄金時代に於けるアメリカ的タイプの実業家を描いて居る。その主人公カツパーウッド (*Cowper-wood*) に於て、男性の慾望と権力意志は、極度に発揮される。その金と女の獲得と、活用の才能に至っては、天才である。

第一部に於ては、フィラデルフィアを舞台とし、主人公の天才も、成功から失敗へと急転落する。第二部は舞台が、シカゴに移るのである。少しく筋を述べて見ると次の様である。

カツパーウッドは、つまらぬ銀行員の子として、フィラデルフィアに生れた。彼は、少年時代から巨富と、それに伴う権力に、あこがれを持ち、それらの獲得に、全力を傾注する男である。そして終に彼は、富と力と両つながら擱む事が出来たのである。だが、彼は、同時に又、淫蕩な半面を持っていた。彼は、富と力を持つ者が、多くの場合陥つたのと同じコースに入り、年上の妻に満足が出来ないで、色々の女と醜聞の種をまいた。そうした事が政敵に乗ぜられて、財政的にも、だんだん没落

し、終に公金横領罪で処罰されるのである。

以上迄が前篇、即ち *The Financier* の大体の筋であるが、次の *The Titan* に於ては、

カツパーウッドは、前篇で関係した一少女と結婚して、シカゴに移住して居る。そこで彼は又、金と力と女の生活に立廻るのである。彼と彼の一味は、市電を永久的に独占して巨富を得ようと計画する。そして殆んど成功の間際になって、又も転落するのである。

以上二篇の主人公、フランク、カツパーウッドは、実在の男をモデルにしたものである。しかしドライサーは、決してそのモデルを憎んで居ない。その男の行為は、一つの気質と、さまざまな境遇の生んだものと考えているからである。ドキュメンタルな価値こそ、ドライサーの小説に見られる第一の要素であると考ええる。

次に *The Genius* について述べて見るに、此の作品の主人公ウイлта (Eugene Wilta) も、中西部の町の貧しい家に生れる。シカゴで、新聞記者などしながら画を勉強し、後に、ニューヨークに出て画家となるのである。

彼は、カツパーウッドの活動的、現実的などは反対に、一人の空想家として描かれて居る。しかし好色的傾向については、同一である。ウイлтаも年上の女と結婚して、やがてそれに飽きる。そしてカツパーウッドと同様に、十八の少女に、非常な愛着を感じるのである。そして、その為にも、天分を十分に、發揮出来ず、失意の生涯を送るのである。

The Genius と十年を隔て、大作 *An American Tragedy* が生れた。

此れは、ドライサーの小説としては、驚異的の歓迎を受け、彼の自然主義の成功を、はつきり標示したものであり、個人に対抗する社会の力を一層明瞭に示して居るのである。次に其の筋を述べて見るならば、

主人公クライド、グリフィスは西部の町々を神の教を、説いて歩く、牧師の子として生れた。少年時代のグリフィスは、カンサス市のホテルにボーイとして働いて居る間、客達の贅沢な生活を目撃する中、すつか

り物質慾に囚はれてしまうのである。その上に、早熟な彼は、病的な性的興味を現わし始めたのである。その後、彼は自動車事故でシカゴに逃げ、更に叔父を頼って、ニューヨーク州のライカーガスト云ふ田舎町に行き、工場の事務員となる。しかし叔父の家族は、彼を冷遇したりしたので、彼は、一種不安な状態に立つて居たのである。そうした時、現われたのが、美しい女工のロバータであった。好色な彼は、彼女と関係を結び妊娠させてしまったのである。ところが、叔父の取り計いで財産家の娘との、結婚話が新に出て来たのである。

彼は、女工、ロバータと結婚して、此の幸運を犠牲にするか、又は、ロバータと別れて此の幸運を擲むか、どちらか選ばねばならぬ事となったのである。彼は、ロバータを誘って湖に出かけ、そして夢遊病者のように、殆んど無意識に、彼女を溺死させてしまうのである。

此の出来事は、小説の半分どころで起つて居り、残りの四百ページは此の犯行の発覚と、裁判と、論告と、弁護と、電気刑の記述に費やされて居る。次にロバータ殺害直後に於けるグリフィスの心理状態を解剖した一節を、原文のまゝ記して見るならば、

“And then the voice at his ear. ‘But this—this—is not that which you have been thinking and wishing for ·this while—you in your great need? And behold!

For despite your fear, your cowardice, this—this—has been done for you. An accident—an accident—an unintentional blow on your part is now sawing you the labor of what you sought and yet did not have the courage to do! But will you now, and when you need not, since it is an accident, by going to her rescue, oncè more plungè yourself in the horror of that defeat and failure which has so tortured you and from which this now releases you?

You might save her. But again you might not!

For see how she strikes about. She is stunned.

She herself is unable to save herself and her erratic terror. if you draw near now, may bring about your death also. But you desire to live! And her living will make your life not worth while from now on. Rest but a moment—a fraction of a minute! Wait-Wait—ignore the pity of that appeal. And then—then—, but there! Behold, It is over. She is sinking now You will never, never see her alive any more—ever, And there is your own hat upou the water—as you wished. And upon the boat, clinging to that rowlock a veil belonging to her, Leave it. Will it not show that this was an accident?”

此の作品を通じて、ドライサーを観察する時、その中心をなして居るのは、彼の懐疑的態度である。そして不可知な運命と云う力に引きづられ、破局に向って進んで行く主人公グリフィスの孤独な姿である。

ドライサーは、読者をしてグリフィスの気持にならせて、実際にグリフィスを理解させる力を持つて居るのである。その為、読者はグリフィスの苦悩を分ち持つようになるのである。此の作品についてオックス、フォード大学教授 James D, Hart は又、次の如く述べて居る。The Oxford ComPanion to American Literature (1956) の中より一節を引用するならば、

The story of a youth of unstable character trapped by circumstances, that lead to his execution for murder, Dreiser sets forth his naturalistic concept of American society.

This view, developed in the four previous books, concludes that, since the chaotic nature of life precludes spiritual satisfactions, it is normal and right to take the most one can from the economic grab-bag.

Dreiser has been acclaimed for this sincere and profound

consciousness of the tragedy of life as he saw it in America, despite the ugliness of his heavy style, and his structural incompetence, chaotic verbosity, and sometimes confused character drawing,

Often bogged down by clumsy writing, his books, nevertheless, are endowed with power by sheer force and an honest massing of details.

ドライサーは又、農夫的作家と云われる。彼は、周囲の出来事に対し、農夫の様に素朴で、柔和な巧奇の眼を向ける。しかし、其の出来事の真の意義に関しては、全く理解する事が出来ないのである。又彼の懐疑的人生観は、彼の時代のアメリカの悩みが反映されて居ると云えるのであり、それ故に、ドキュメンタルな価値を、彼の小説の中に、見出す事が出来るのである。

ドライサーの文章について、一言するならば、文法的誤謬、ディテイルの過多が多く見られるのである。此は、作家としては、重大な欠点であるが、反面その粗雑さが、それなりに、現実の再現であり、力となって居る事も否定出来ない。

又ドライサーの小説は、何れも性慾描写が、濃厚である。例えば、
"Albertine," と云ふ三角関係を扱った物語りに於いて、次の様な暴露的一節を見るのである。

„Without a word I seized her, There was a struggle. As always only more violently, she protested. At last, exhausted, or pretending to it (how is one to know?) she sank down.

I could feel in her even then a quarrel between yielding and resisting. At last, but with mock opposition, I fear (I never could be sure), she surrendered, calling me brute, devil!"

ドライサーの中、短篇集として自叙伝 A Book about Myself (1922) Free and Other stories (1918) Twelve Men (1919) Chains (1927)

A Gallery of Women(1928) 等が有り、又エッセイ集として、Hey Rub-a-Dub-Dub (1920) が有る。彼は又、1928年秋ソヴェートに招かれ、翌年その印象記 Dreiser Looks at Russia を出した。

晩年社会主義転向後の思想を述べたものに、Tragic America (1931) America is Worth Saving (1941) が有る。

第二次大戦後は、共産党に加盟したと伝えられたが、間もなく死去した。死後出版として、The Seic (1947) The Hulwork (1946) が出た。

以上アメリカ、ナチユラリズムの形成と其の代表的作家であるドライサーについて、少しく解明した次第である。 終 (36.1.10)

参 考 文 献

- Calverton, V. F.: The Liberation of American Literature, New York, 1932.
- Menken, H. L.: A Book of Preface, New York, 1924
- Pattee, Fred L.: Side lights on American Literature, New York, 1922
The Development of the American Short Stories, New York, 1923.
- Van Doren, Carl: The American Novel, New York, 1927.
- Foerster, Norman: American Criticism, Boston, 1928.
Reinter pretation of American Literature, NewYork, 1928
- Michaud, Regis: The American Novel To-day, Boston, 1928.
- James D. Hart: The Oxford Companion to American Literature, New York, Tokyo, 1956
Japanese Books
- Masaru, Siga: The Growth of American Literature, Kenkyu-

- sha, Tokyo, 1956.
- Gen, Sakuma: The study of American Novel, Kenkyusha,
Tokyo. 1934.
- Jack, Carne } The History of American Literature, Hakusui-
Kingi. Shimada, } sha, Tokyo, 1955.
- Kenkyusha's Simplified English Dictionary.
(English through English)